

## 教育心理学と実践活動

## 国語教育の新しいパラダイム

鹿内 信善  
(北海道教育大学)

## A New Paradigm for Teaching Language Arts

Nobuyoshi SHIKANAI  
(HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION)

New approaches to teaching should be developed in the context of the history of education. By integrating advances in psychology and other related fields with approaches used in the past, new approaches can be developed. The present author utilized this process to develop several new teaching approaches. In the present paper, (a) 3 creative approaches to reading that were developed by the present author are described, (b) it is proposed that “sight” instruction should be included in language arts education, and (c) a new Storyboard Writing approach that incorporates development in psychology and other related fields and which utilizes “sight” is proposed. Storyboard Writing is an approach to teaching in which students base their writing on pictures that they have seen. It was originally used in teaching language arts in China. Photographs are a form of “visual text”. In language arts classes, it is important that students be taught to read not only written texts, but also visual ones. Children should be helped to develop the visual literacy necessary for their daily lives.

Key Words : language arts, creative reading, storyboard writing, visual literacy, “sight” instruction

新しい授業方法を提案するためには、教育の歴史を振り返ることも重要である。これまでに行われてきた方法に、心理学およびそれに関連する領域の研究成果を付け加えることによって、新しい授業方法が生まれてくる。筆者も、そのようなアプローチをとることによって、いくつかの新しい授業方法を開発してきた。

本稿ではまず、筆者が開発してきた「創造的読み」の指導方法を3つ紹介した。次に、「見ること」の指導も国語教育に取り入れるべきである、という主張を概観した。「見ること」の指導を国語教育に取り入れる具体的な方法として「新しい看図作文」を提案した。看図作文は、絵を見て作文を書いていく方法である。看図作文は、もともと中国の国語教育に取り入れられている方法である。筆者は、中国の看図作文に、心理学および関連領域の研究成果を付け加え、「新しい看図作文」を考案した。

写真も読解可能なビジュアルテキストである。これからの国語教育は、文章テキストのみならずビジュアルテキストを読み解く方法も教えていく必要がある。また、日常生活に活用可能なビジュアルリテラシーを育てていかなければならない。

キーワード：国語教育、創造的読み、見ること、看図作文、ビジュアルリテラシー

## I. 教育心理学と教育実践

教育心理学は教育実践に直接関わるべき学問である。「その関わり方は、多くの教育研究者が教育実践の場で行っている、実践を後付けただけの評論家的な形で」(杉江, 2004, p. 156) あってはならない。杉江も指摘するように教師とともに実践をつくり上げていくのに役立つ関わり方ではなければならない。

筆者はこれまで、小・中・高・大の教師たちと共同で、

多くの授業改善研究・授業開発研究を進めてきた。教師たちとの共同研究を通して筆者は、「創造的読み」「新しい看図作文」などの学習方法・指導方法を提案してきた。本稿では「創造的読み」「新しい看図作文」等をキーワードにして国語教育の新しいパラダイムを探っていく。

「これまで、多くの授業方法が提案され実践されている。その中のあるものは、ひとつの時代が終わると教室から消えていく。そしてまた、別の方法が提案され人気

を集めていく。しかし、さらに時代が移ると、忘れられていた授業方法が再評価されてくることがある。かつての授業方法が掘り起こされ、新しい時代の要請にあうようにアレンジされ再登場してくる。授業改善の歴史はその繰り返しである」(鹿内, 2007b, p. 144)。このため筆者が提案する「創造的読み」や「新しい看図作文」も、教育心理学・教育学、文学などの領域に様々なルーツを持っている。

## II. 創造的読み

### 1. 創造的読みのルーツ

わが国の心理学では「創造的読み」概念のルーツを1950年代まで遡ることができる。上代(1953)は『思考的学習の心理』という本を著している。この中で上代は、Deweyを参考にしながら、文章理解のプロセスを次のように記述している。「意味を構成するのは読み手なのだということを忘れないでおくことが大切である。即ち、読み手は、自分の経験の中で、今眼前にある話と文脈に丁度あてはまる如きものを選び出して、体制化する……」(上代, 1953, p. 97)。さらに上代は、この考えを「創造的読み(creative reading)」という概念に発展させている。創造的読みとは「読みの材料の表面的な理解と文字通りの解釈を超えていく読み」(上代, 1953, p. 109)である。また、創造的読みは「自分の経験の所産と現在の読みの経験とを総合すること」(上代, 1953, p. 111)により成立する。つまり、目の前にあるテキスト情報と読者自身の既有情報を総合することによって新しい意味を創り出すことを「創造的読み」と呼んでいるのである。

上代の説明は、現代の認知心理学が考えている文章理解のプロセスと完全に一致する。このため鹿内も創造的読みの定義として上代の考え方をそのまま取り入れている。

上代の『思考的学習の心理』は一人の実践家に影響を与えた。大塩卓は、1960年代に、上代の著書を手掛かりにして「創造的読みをめざす学習指導の実践」を重ねた。大塩は鳥取で活躍した実践家である。地方の教育史を紐解くと、「創造的読み」と志を同じくした実践をいくつも拾い上げることができる。例えば、山路兵一は大正年間に奈良で「読書創造」という読解指導を展開した。飯田広太郎は札幌で活躍した。飯田は大正から昭和の初めにかけて「創造的読解」指導を実践した。これらの「創造的読みの教育史」は鹿内(2005a, 2005b)に詳しくまとめられている。

### 2. 創造的読みの実践方法と意義

鹿内(1989, 2007a)は創造的読みの教育史を踏まえた上で、創造的読みの新しい実践方法を提案している。鹿内

が提案している創造的読みの方法は次の3つである。オリエンテーション設定法・フォーカシング法・物語法。オリエンテーション設定法はFraser(1975)の文章理解モデルを参考にして考案したものである。フォーカシング法はGendlin(1978 村山他訳1982)のカウンセリング技法を参考としている。物語法ではプロップ(1983, 1986)による物語の形態論的構造分析を活用している。

鹿内はオリエンテーション設定法・フォーカシング法・物語法を実際の学習指導でも活用できる具体的な方法にして提案している。この提案に対して鶴田(2006)は、国語教育学の立場から次のような論評を加えている。これまでの国語教育では「『受容理論』的に言えば、『テキストの呼びかけ』に応えられる読者を育てるという発想が不足していたのである。もちろん、『読書行為論』という観点から、そうした読者主体を育てるための作品分析の観点・方法を提案した研究者もいた[文献省略・鹿内]。しかし、教育現場では、そうした『読者論』を支える基礎の部分は顧慮されることなく、耳に入りやすい上澄みの部分だけが広まった。つまり、読者主体の復権が未熟な学習者重視論(田中実氏のいう『エッセ読みのアナキー』)へと変質したのである。そこでは、「読み」の原理や方法が真剣に問われなかったのである。／こういう状況に対して、鹿内氏は、真に主体的に読むための方法として『創造的読み』を提唱した」(鶴田, 2006, pp. 174-175)。

このように、教育心理学という異領域から発信した「創造的読み」の方法が国語教育の領域でも新しいパラダイムとして受け入れられるようになってきている。

## III. 国語教育に求められる新しい学力

### 1. 何を取り入れるか

新しい学習指導要領が発表された(文部科学省, 2008)。新学習指導要領では「話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと」の4つが、国語科の基本的指導内容として取り上げられている。これは従来の学習指導要領とまったく変わっていない。新学習指導要領では変化がなかったが、「話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと」以外に、もう一つ大切な指導内容を国語教育に取り入れようとする動きが世界的規模で広がっている。

浜本(1996)は、国語科教育の目標を次のように整理している。「これからの国語科教育は、言語体系・言語生活・言語文化を生み出していく根底にある言語化能力に働きかけ、その能力を活性化し、より強力化していくことを目標とすべきであるということになろう」(浜本, 1996, pp. 32-33)。浜本は、この能力を身につけさせる方法として次の3つを提案している。「それは(1)生活経験を豊かにし、生活において事物や経験と言語とを結びつけることであ

り、(2)絵画・写真・テレビ・ビデオなどの映像を言葉化する表現活動をさせることであり、(3)文学という虚構の世界に生きさせて、感動をとおして言葉と出合わせることである」(浜本, 1996, p. 33)。

浜本の提案の新しさは、国語科教育の中に「映像」を「見る」活動を取り入れているところにある。町田(2005)も浜本のこの提案に注目し、さらに次のような主張を展開している。「映像を教材化する際に、『言語化能力』の育成という目標を授業の中心に位置付けることができる。映像から発信されるイメージやメッセージを、ことばによって理解しかつ表現するという活動を通して、『言語化能力』の育成を図ることが、授業の目標となる」(町田, 2005, p. 131)。町田が意図しているのは、「映像を補助教材ではなく本教材として活用」(町田, 2005, p. 133)した授業である。この観点から町田は、アニメーションやテレビドラマを教材にし、「映像を言葉化」させていく国語の授業を提案している。

アニメーション・テレビドラマはいずれも動画である。しかし、「映像」は多様であり、動画に限定されるものではない。広義の映像には絵図等の静止画像も含まれる。町田も指摘するように、「多様な映像を教材化して、教室での実践を通してその意味を検証する必要がある」(町田, 2005, p. 139)。鹿内・渡辺・伊藤・望木・飯田(2006)も「見る」活動を取り入れた国語科授業づくりの可能性を検討している。

## 2. 「見ること」と国語教育

「見ること」を国語教育に取り入れようとする動きはPISA 学力調査が発表されてからさらに大きなものとなってきている。PISA ではテキストを次の2つの形式に分けている。「①『連続型テキスト』は、通常、文と段落から構成され、物語、解説、記述、議論・説得、指示、文書または記録などに分類できる。②『非連続型テキスト』は、データを視覚的に表現した図・グラフ、表・マトリクス、技術的な説明などの図、地図、書式などに分類できる」(国立教育政策研究所, 2004, p. 150)。

PISA では、非連続型のようなビジュアルテキストも読み解きの対象になると考えている。このことが、国語科の中で「見る」力を育成する方法を考えようとする一つのきっかけになっている。なお visual と text は、それぞれビジュアルとヴィジュアル、テキストとテクスト、のように異なったカタカナ表記がなされる。本誌では「ビジュアル」と「テクスト」を採用しているが、引用文中で「ヴィジュアル」や「テクスト」が用いられている場合は、引用文中の表記に従っていく。

奥泉(2006)は、「見ること」に関する英語圏のカリキュラムや文献を概観している。そして「ビジュアルリテラ

シー」という概念をキーワードとして取り出している。「ビジュアルリテラシーとは、絵や写真、図表、動画といった視覚的テキストを読み解き・発信する力のことである」(奥泉, 2006, p. 38)。

奥泉によれば「ビジュアルリテラシー」の育成を言語科目の中で行う方法は3つある。「一つ目は、イギリスのように、『見ること』領域を策定せずに、従来の学習では充分な対応が難しい動画や広告等のテキストを扱う領域を、『読むこと』領域の下位に、テキストの1種類として組み込む方法である。そして二つ目は、カナダ(オンタリオ州)のように『口頭・視覚的コミュニケーション』領域に『話すこと・聞くこと』と関連させて組み込む方法である。三つ目は、WA州やニュージーランドのように、従来からある『読むこと』『書くこと』『話すこと・聞くこと』領域の他に、『見ること(見せること)』領域を策定する方法である」(奥泉, 2006, p. 41)。

以上は英語圏の動向である。「見ること」を国語教育に取り入れている国は英語圏以外にもある。例えばフィンランドの小学校3年用国語教科書(Wäre, Töllinen, & Koskipää, 2004 北川他訳編 2006)ではすべての頁にビジュアルテキストが掲載されている。またビジュアルテキストを読み解きながら答えていく発問も多く設けられている。

中国も国語(語文)教育の中で「見ること」を重視している。中国の国語教育には多様な「見る」活動が取り入れられている。「見る」は中国語では「看」と表記される。またビジュアルテキストを読み解く活動は「看図」と呼ばれる。中国の国語教育には、「看図」を伴う活動が盛んに取り入れられている。たとえば高長梅(2000)の小学校低学年用国語指導参考書では次のような、看図を伴う学習活動が提案されている。「看図作文・看図読拼音・看図把詞語組成句子・看図把兩句話合成一句話・看図写幾句連貫的話・看図把話具體・看図写一句完整的話・看図選詞填空・看図把句子補充完整・看図填空再写話・看図把話写生動・看図写出三種不同句式的句子・看図写出人物說的話・看図把乱句組成一段通順的話・看図補写一段話・看図統写一段話・看多幅図写短文・看一幅図写一段話・看図回答問題写一段話・看図描写人物的外貌・看図写話読兒歌、等」。

## IV. ビジュアルリテラシー育成のための授業開発

### 1. 看図作文のルーツ

筆者らはPISA が実施される前から、ビジュアルリテラシー育成のための授業開発研究を行っている。鹿内・盛山(1990)は創造的読みの研究で明らかにしてきた原理をビジュアルテキストの読解指導に活用する試みを始めた。また鹿内(1998)は、わが国で初めてビジュアルリテ

ラシーに関する文献展望を行っている。ただし、当時はまだビジュアルリテラシーという用語が定着していなかったので「図形記号解説」という語を用いている。その後筆者らは、これらの研究を看図作文の授業開発研究に発展させてきた。

看図作文は、上でも少し触れたが、中国の作文教育で盛んに用いられている指導方法である。看図作文はビジュアルテキストを読み解かせながら作文を書かせていく方法である。看図作文のルーツは中国にある。しかし筆者らが提案しているのは中国の看図作文そのものではない。中国の看図作文に心理学・記号論・物語論等の研究成果を取り入れた「新しい看図作文」である。

もちろん、ビジュアルテキストを見せて作文を書かせる方法は、わが国でもいろいろ行われている。例えば4コマ漫画をもとに作文を書かせる実践も行われている。また、絵をもとに作文を書かせる教材を載せている国語の教科書もある。

田中 (2008) は、金子彦二郎 (1889~1958 年) の作文教育資料を発掘している。その資料には、既に大正から昭和の初期にかけて、絵を見て作文を書かせる実践が行われていたことが示されている。看図作文に類した試みはわが国においても既に行われている。さらに中国の国語教育では小学校1年から6年まで、すべての学年で看図作文が取り入れられている。また大学入試でも看図作文が出題されることもある。中国では看図作文そのものの歴史も古く、次のようなエピソードも伝えられている。

中国の古典「岳陽楼記」の著者は範仲淹である。また岳陽楼は、洞庭湖畔に建つ建物である。範仲淹は、この洞庭湖と岳陽楼についての名文を書いた。しかし実際には、範仲淹は洞庭湖に行ったこともなければ岳陽楼に登ったこともなかったのである。当時、範仲淹は河南鄭州に左遷されていた。そこで友人の滕子京が、慰めに一幅の絵「洞庭晩秋図」を贈ってくれた。それを喜んだ範仲淹は、「洞庭晩秋図」と以前遊んだことのある「太湖」の思い出を結びつけて「岳陽楼記」を書き上げたのである。名文の誉れ高い「岳陽楼記」は、実は看図作文だったのである。範仲淹は中国宋代の人である。看図作文は、中国ではこれほどまでに長い歴史と伝統を持つ作文の方法なのである (恵, 2000 参照)。

## 2. 新しい看図作文の提案

授業改善・授業開発で大事なものは、古いものを捨てることではない。既に誰かがやっている方法を顧みることも必要である。そしてそれを、時代の要請に応じてアレンジしていくことが大切なのである。中国で行われている看図作文に心理学・記号論等の研究成果を加えアレンジした「新しい看図作文」(以下、単に「看図作文」と記す)

を筆者らは提案している。その詳細は既に鹿内 (2003) にまとめてある。そこで本稿では、筆者らの最近の研究を取り上げ紹介していく。

Walker & Chaplin はビジュアルリテラシーを「**視覚的なもの**」を解説／制作する能力」(Walker & Chaplin, 1997 岸他訳 2001, p. 119) と定義している。奥泉 (2006) が紹介している定義でも、ビジュアルテキストの読み解きのみならず、発信も含めてビジュアルリテラシーを捉えている。メディアリテラシー研究でも、メインストリームメディアを読み解くこととオルターナティブメディアを発信すること、この2つを含めたものとしてリテラシーを考えている(例えば鈴木, 1997)。したがってビジュアルリテラシーの育成方法を考えていく場合、次の2つの問題を解決していく必要がある。(1)ビジュアルテキストをどのように読み解かせるのか。(2)読み解いた結果をどのように発信させるのか。筆者らは、この2つの問題を解決する方法としての看図作文を提案している。

## V. 看図作文授業の実際

### 1. ビジュアルテキストの読解

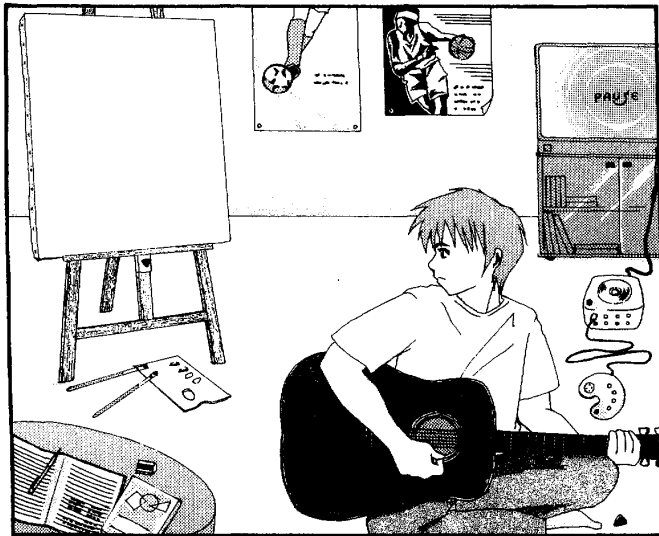
ビジュアルテキストを見て、そこから意味を読み解くためには、次の3つの活動が必要になる。第1は変換。これは、テキスト中で記述されている概念や内容を別の言葉に言い換えたり、ある種の記号表示法を他の表示法に換えたりする活動である。第2は要素関連づけ。これは、テキストを構成している諸要素を相互に関連づける活動である。第3は外挿。これは、テキスト中で記述されている内容を越えて、結果について推量したり発展的に考えたりする活動である。この活動分類は Bloom, Hastings, & Madaus (1971 梶田他訳 1973) の教育目標分類学を参考にしたものである (鹿内・渡辺, 1992)。

この活動分類は、ビジュアルテキスト読解の処理モデルとしても活用できる。またビジュアルテキスト読解の処理モデルをこれ以上複雑にする必要はない。教師が教室で実際に活用できるように、モデルをできるだけシンプルにしておくことも重要である。ただし授業の中で学習者にこれらの活動を行わせるためには様々な工夫が必要である。

### 2. 授業の工夫

Figure 1「ギター少年」をビジュアルテキストにした看図作文授業の実際 (鹿内・渡辺・栗原・伊藤・石田・菅原, 2007) を見ていく。

ビジュアルテキストを読み解くには3つの活動が必要である。しかし、これらの活動をするように直接教示しても、学習者に十分な変換・要素関連づけ・外挿活動を行わせることはできない。



©yuki.ishida

Figure 1

この3つの中で変換は比較的簡単な活動である。このため、「この絵にはどんなものが描かれていますか?」という直接的な質問によって変換活動を引き出すこともできる。「ギター少年」絵図の場合では、「テレビゲーム」「キャンパス」などと答えることが変換活動になる。しかし、比較的簡単な変換活動でも、直接的な質問・教示だけでは十分に引き出すことができない。例えば「ギター少年」絵図中に貼られた2枚のポスターはともに「ドリブル」になっている。しかし「どんなものが描かれていますか」と質問するだけでは、学習者は「ドリブル」を見逃してしまう。その結果「ドリブルのポスター」という変換はほとんど行われぬ。

外挿はさらにレベルの高い活動である。このため、「絵図に描かれていることを越えて考えを発展させてください」という直接的な教示を与えるだけでは、十分な外挿活動を引き出すことができない。教師は、直接的な教示以外の方法で変換・要素関連づけ・外挿活動を引き出す手立てを考えなければならない。当然、ただ「絵を見て作文を書いてください」というだけで看図作文を書いてもらえるわけでもない。様々な「授業の工夫」を考えることが、看図作文授業開発研究にとって重要になる。

### 3. 授業のプロセスと作文例

以下の授業記録は鹿内が、高校の職業系クラスで行った授業の一部である。

まず、生徒たちに Figure 1 を見せて「この子(絵図中の少年)は向上心があると思いますか?」と質問する。すると生徒たちは、「解きかけの問題集」「途中でとめたゲーム」「描こうとし始めて何も描いていないキャンパス」などの「要素を関連づけ」て「向上心がない」と答えてくれる。「この子は向上心がない」という多数意見を確認

した後で、次のように授業を進めていく。

T これ(サッカーの絵)は何していますか?

S1 ボール蹴ってる。

T ボール蹴ってる。そうですね。こういうふうにボール蹴るの、なんて言いますか?

S2 ○○君, サッカー部だ。

T じゃ○○君。

S3 ドリブル。

T そう。ドリブルですよ。じゃ、こっち(バスケットボールの絵)は何をしていますか?

Ss ドリブルだ。

T そう、どっちもドリブルしてるんですね。ドリブルって、何のためにするんでしょう?

S4 移動する。

S5 前へ進む。

T そう。移動する、前へ進むんですね。この子は、2枚ともドリブルの絵を貼っています。ということは、

Ss あっ、あー!

ここまで授業が進むと、絵図中の少年に対する理解が180度変化していく。「向上心がない」と思っていた子が、実は「前に進みたい」という願いを持っていたのである。

この研究で作成した絵図は、物の見方を変えることの大切さを気づかせてくれる教材にもなる。ビジュアルテキストの作成段階でも授業を意識した工夫が必要になる。筆者らはアーティストにも研究グループに加わってもらうことにより、この問題を解決している。本稿で紹介する絵図も、筆者らが開発したオリジナルなビジュアルテキストである。

筆者らが提案している看図作文では、ビジュアルテキストを読み解く授業をまず行う。そのあとで、読み解いた内容を作文にまとめさせる。上述の授業記録の学習者は高校生であるが、Figure 1 は小学校高学年から大学生まで活用することができる。ただし小学生で授業をするときは絵図中の少年を小学校高学年児に描き換えたものを用いている。次に小学校6年生の看図作文例を載せておく。紙数の都合上、ここでは比較的短いものを例示しておく。

#### 〈小学校6年生A児の作文例〉

「ゴールを目指して…」

僕は、悩んでいた。僕の将来の夢について。ギター・勉強・ゲームどれも熱中する事ができなかった。たしかに、あきっぽい性格かもしれないけど興味がわかなかった。僕はすべて中途半端。勉強もギターも全てと中でやめてしまう。今、自分が何をし

たいのか・何に興味をもっているのか自分の事なのに分からなかった。僕は、自分を変えたくていろんな事に挑戦した。でも、やっぱりだめだ。

ふと、部屋をみわたした。ポスターが目があった。バスケットボールとサッカーのポスター。僕の好きなスポーツで他の事には、興味のない僕だけど、この2つはちがうんだ。ギターには、GOALがないけどこの2つは、GOALがある。自分の目で見えるんだ。今思った。これが興味じゃないかと。僕の目指しているのは、ゴールだあ！僕の事は、決まった。少しだけど、変わった気がした。

## VI. 国語教育のニーズに応える

筆者らは、単に作文を書かせるためだけに看图作文の授業開発研究を行っているわけではない。国語教育のニーズに応える教材開発・授業開発を心がけている。優れた国語教育実践を重ねている遠藤(1992)も、早くから「見る力」を育てる国語の授業を行っている。遠藤はまた「自己をふり返り、未来を探るにふさわしい『見る力』を伸ばすこと」(遠藤, 1992, p. 144)の必要性を指摘している。先に挙げた「ギター少年」の絵図とそれを用いた授業モデルは、遠藤の主張に応えるものとして開発した。

想像したことなどを基に物語を書く活動は、新学習指導要領でも「書くこと」領域の重要な「内容」になっている。鹿内・渡辺・栗原・伊藤・石田(2007), 鹿内・兒玉・石田・渡辺・伊藤(2008, 印刷中)が開発した看图作文教材と授業は、物語作文の指導に活用できる。

意見文・行事作文なども指導が難しい文種である。鹿内・栗原・渡辺・伊藤・石田(2007), 鹿内・渡辺・石田・伊藤・兒玉(印刷中)は、それぞれ意見文指導・行事作文指導に活用できる看图作文教材と授業モデルを提供している。

小中学校の教師たちも、国語教育のニーズに応える看图作文方式をつくる努力をしてくれている。三上・三上(印刷中)は中学校の選択国語7時間に看图作文を組み込み、「看图作文の単元学習化」を試みている。また潮来市立津知小学校(2008)は、3つの学年で看图作文授業を公開する公開授業研究会を開催している。これらの活動によって、筆者らが提案している看图作文を、多くの教師が共有できる作文指導法にしてくれている。

さらに鹿内(2005c, 2006, 2007c)は、看图作文に関するわかりやすい解説を行い、看图作文を実践したいという教師たちのニーズに応えている。

## VII. 国語教育における心理学の活用

### 1. 基礎心理学の活用

創造的読み・看图作文に限らず、筆者らの授業開発研究では、心理学の様々な研究成果を活用している。例えば鹿内・栗原ら(2007)は、意見文指導に活用可能な看图作文教材と授業を開発している。この研究では、心理的リアクタンスが意見文を書くための動機になるような工夫をしている。この授業開発にあたっては、心理的リアクタンスに関する多くの研究を参考にしている。

### 2. 創造性心理学の活用

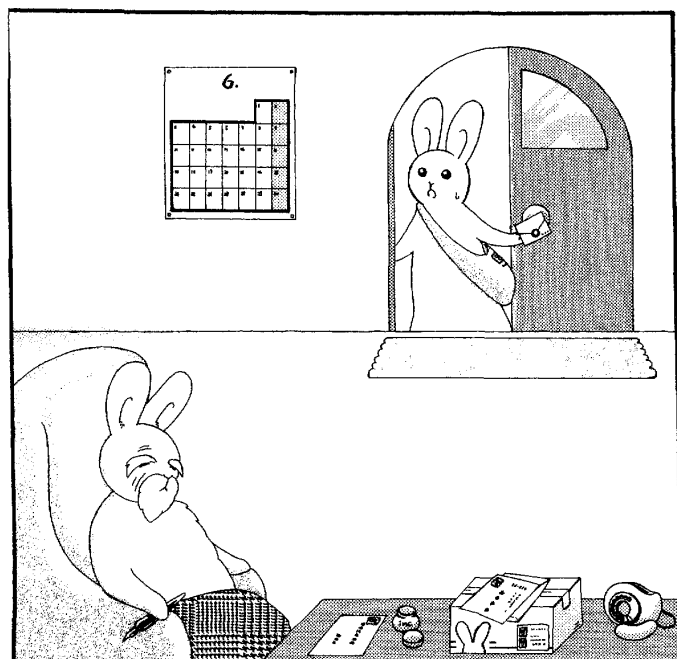
鹿内・渡辺ら(2007)は、創造的看图作文を書かせる方法を提案している。創造的看图作文を書かせる授業では、創造性心理学に関する知見が必要になる。鹿内・渡辺・石田・伊藤・栗原(2008)は、創造的思考開発技法の一つであるインプット・アウトプット法を活用した看图作文授業を開発している。インプット・アウトプット法とは、「G・E社(ジェネラル・エレクトリック)が主に機械設計(とくに自動装置)に使った方法で、制限条件のワク内で最初の状態(インプット)を展開して、最後の状態(アウトプット)にたどりつこう、とする考え方」(産業能率短期大学, 1970, p. 151)である。インプット・アウトプット法による看图作文では、絵図を2枚用いる。また学習者が発展させるべき思考の方向性が2枚目の絵(アウトプット)で示されている。この方法では、学習者は、インプットの絵とアウトプットの絵の間に入る情報を外挿していけばよい。このため、学習者の外挿活動を引き出すために教師が行うべき授業の工夫は比較的簡単になる。適度な曖昧性を持った絵を提示すると、学習者は楽しみながら情報を産出していくことができる。次に挙げる2幅は学習者からも授業をする教師たちからも好評を得ている絵図である。

授業記録等は省略するが、Figure 2・Figure 3を用いた小学校6年生の作文例を一つ紹介しておく。

#### 〈小学校6年生B児の作文例〉

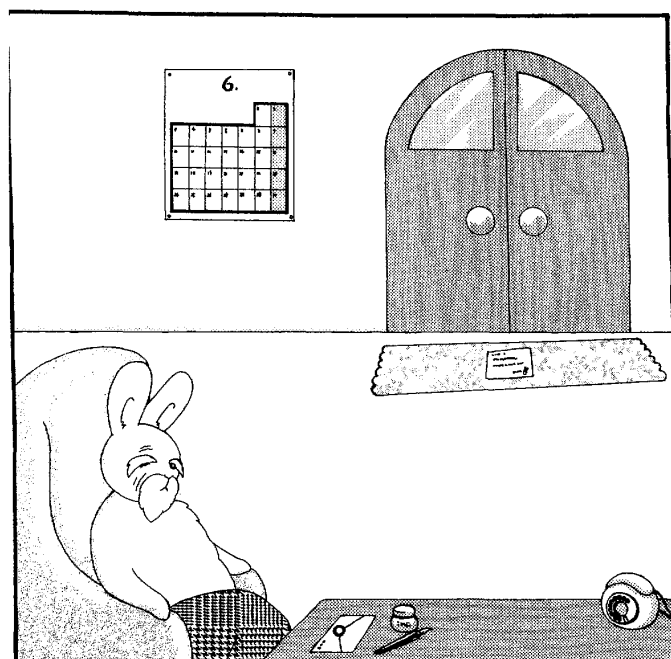
一郎という名前の、若い郵便屋がいた。彼は五年前に家を出てから、一度も家に帰った事は無かったが、ある日の事、その故郷へ帰る事になったのだ。なぜなら、自分の父へあてられた手紙が、郵便物の中にまぎれこんでいたからだ。

一郎は静かに、自らの家の戸をたたいた。返事はない。もう一度たたく。やはり返事はない。仕方なく、彼は戸をあけ、ほっとした。父はねむっていたのだ。一郎は安心すると、部屋の中を見回した。父の机の上に、小包や、手紙がたくさんあった。ふと、一郎は、父の手に万年筆が固く握られている事に気付いた。手紙を書いていたのであろうか。あ



©yuki.ishida

Figure 2



©yuki.ishida

Figure 3

て先は…。「一郎」。一瞬、彼はとまどった。机の上に置かれた小包や手紙に書かれていたのは、全て「一郎」だった。一郎，一郎…。その名前の持ち主は、一つの罪悪感を感じたようだ。父の手から万年筆を取ると、自分の持っていたありあわせの紙に、ふるえる手でこんな文を書いた。「父さんごめんなさい。」そして机の上に、仕事で届けるはずだった手紙を置き、そのかわりに父の手紙と小包を両うでにかかえた。もちろん、家を出る時に自分の書いた手紙をひらり、と落とすのも忘れなかった。

一郎の父が目覚めた時、一郎の姿はなかった。だが、入口に落ちた手紙を見て、彼はゆっくりとほほえんだ。

鹿内・渡辺・伊藤 (2005), 鹿内・渡辺・栗原・伊藤・石田 (2008) は、視点変更を促す看図作文授業を提案している。視点変更は創造性開発の重要な技法であり、この研究にも創造性心理学の研究成果が反映されている。

筆者は看図作文以外にも創造性心理学の成果を活用した国語の授業づくりを試みている。鹿内 (印刷中b) では Finke, Ward, & Smith (1992 小橋訳 1999) のジェネプロアモデルを活用した詩の創作指導を行っている。この研究ではジェネプロアモデルは詩の創作授業をつくる際の良いモデルになることが示されている。

### 3. 動機づけの捉えかた

「動機づけ」も心理学の重要な概念である。吉田 (2008) は質問紙法を活用することで、看図作文体験が作文を書

くことに対する内発的動機づけを高めることを確かめている。看図作文は、確実に学習者の内発的動機を高める指導法である。

質問紙法を入れた研究は、一度くらいはしておく必要があるだろう。しかし、すべての授業開発研究で調査を入れる必要はない。実践家や、実践について本当に考えている研究者なら、学習者の様子を見るだけで動機づけの程度くらいは簡単に把握できる。しょっちゅう質問紙調査を入れることは実践の妨げにすらなる。鹿内・兒玉ら (2008) は、授業記録と映像記録によって、学習者の動機づけが高まっていく様子を報告している。教育実践に関わる研究は、このような研究方法をもっと積極的に取り入れていくべきではないだろうか。

## VIII. 研究の発展と課題

### 1. 活用力を育てる

写真も読み解きの対象となるビジュアルテキストである。このことは名取 (1963) によって、早くから指摘されてきた。また、開発教育・国際理解教育で用いられている「フォトランゲージ」(国際協力推進協会, 2001) も、写真の読み解きを伴う活動である。筆者らも、写真をビジュアルテキストにした授業開発研究を進めている。次の3つの研究では、写真をビジュアルテキストにしている。

鹿内・伊藤・石田・渡辺・伊藤 (2007) は、ビジュアルリテラシーをキャリア教育に活用することを目的にした授業開発を行っている。また、この研究は、大学初年次教育にも活用できるようにまとめている。

鹿内・伊藤・石川・伊藤・石田 (2008), 鹿内・伊藤・石田・伊藤・石川・渡辺 (2008) は, ビジュアルリテラシー教育を景観教育に活用していく可能性を検討している。

現在「活用力を育てる」ことも, 国語教育改善のキーワードになっている。下田 (2008) は, 「活用型の教育」に必要な教材づくりの要点を次のようにまとめている。「教材が児童生徒を取り巻く日常現実社会とのつながり・文脈のなかで作られることが必要です。また, 日常現実社会で生きる人間とのつながり・文脈のなかで作られることも必要です」(下田, 2008, p. 18)。鹿内らが行っているビジュアルリテラシーの授業開発に関する一連の研究では, 「日常現実社会とのつながり」を重視した教材開発を行っている。ビジュアルリテラシーを何に活用するのか, ということを考えた研究を今後も進めていきたい。

ビジュアルリテラシーの教育は, 「人間とのつながり」を強める教育方法にもなりうる。例えば, 看图作文は「協同学習を活性化する方法にもなる。筆者が提唱する『あたらしい看图作文』では, 適度な『曖昧さ』をもった絵図テキストを学習者に読み解かせる。絵図テキストに適度な『曖昧さ』があるため, 学習者によって, その読み解きに微妙なズレがでてくる。このズレが協同学習での話し合いを活性化させる」(鹿内, 印刷中 a)。協同学習のツールとして看图作文を活用する研究も継続していきたい。

## 2. 教育心理学研究者の実践力

「教育」にウェイトを置いた「教育心理学」を研究している者は, 自らが研究していることを自ら実践できなくてはならない。筆者は「創造的読み」も「看图作文」も, 自分で提案していることはすべて, 自分で何度も授業を行ってきた。また, 各地の学校や研修会からのリクエストに応じた模擬授業やワークショップを, 筆者自らがやっている。

リテラシーに関する研究も同様である。前述したように最近の研究では, テキストの読解と読解結果の発信をセットにしてリテラシーを捉えている。鹿内 (2008) は, わずか 4 行のアイヌ古謡を創造的に読み解き, その読み解き結果を映像作品に仕上げるプロセスを解説している。さらに実際に, 映像作品制作をプロデュースし, テレビメディアを通して発信している (石田・石田・鹿内, 2008)。

教育心理学が本当に実践に関わろうとするなら, 教育心理学の研究者も自らの実践力を磨いていく必要があるのではないだろうか。

## 引用文献

Bloom, B. S., Hastings, J. T., & Madaus, G. F. (1971). *Handbook on formative and summative evaluation*

*of student learning*. New York : McGraw-Hill. (ブルーム, B. S.・ヘスティングス, J. T.・マドゥス, G. F. 梶田叡一・渋谷憲一・藤田恵璽(訳) (1973). 教育評価法ハンドブック—教科学習の形成的評価と総括的評価— 第一法規)

遠藤瑛子 (1992). *ことばと心を育てる—総合単元学習—* 溪水社

Finke, R. A., Ward, T. B., & Smith, S. M. (1992). *Creative cognition*. Cambridge, MA : MIT Press. (フィンケ, R. A.・ウォード, T. B.・スミス, S. M. 小橋康章(訳) (1999). 創造的認知—実験で探るクリエイティブな発想のメカニズム— 森北出版)

Frase, L. T. (1975). Prose processing. In G. Bower (Ed.), *The psychology of learning and motivation : Advance in research and theory* (pp. 1-47). New York : Academic Press, 9.

高 長梅(主編) (2000). *看图写文章—低年級A巻—* 陝西旅游出版社

Gendlin, E. T. (1978). *Focusing*. New York : Everest House. (ジェンドリン, E. T. 村山正治・都留春夫・村瀬孝雄(訳) (1982). *フォーカシング* 福村出版)

浜本純逸 (1996). *国語科教育論* 溪水社

恵 萍(主編) (2000). *怎樣写供材料作文* 甘肅少年儿童出版社

石田ゆき・石田 稔・鹿内彦輝(信善) (2008). うさちゃんポンテレケ HBC テレビ2008年2月7日放映 潮来市立津知小学校 (2008). 平成20年度校内研修支援(国語科)学習指導案綴 潮来市立津知小学校 上代 晃 (1953). *思考的学習の心理* 柳原書店 国立教育政策研究所 (2004). *生きるための知識と技能—OECD 生徒の学習到達度調査(PISA)—* ぎょうせい

国際協力推進協会 (2001). *開発教育・国際理解教育ハンドブック* 国際協力推進協会

町田守弘 (2005). *声の復権と国語教育の活性化* 明治図書

三上久代・三上勝夫 (印刷中). *看图作文の単元化—中学3年選択国語科での実践から—* 北海道教育大学紀要(教育科学編), 59(2).

文部科学省 (2008). *小学校学習指導要領* 東京書籍 名取洋之助 (1963). *写真の読みかた* 岩波書店 奥泉 香 (2006). 「見ること」の学習を, 言語教育に組み込む可能性の検討 リテラシー研究会(編) *リテラシー2—ことば・文化・社会の日本語教育へ—*(pp. 37-50) くろしお出版



- プロップ, V. 北岡誠司・福田美智代(訳) (1983). 昔話の形態学 白馬書房
- プロップ, V. 斎藤君子(訳) (1986). ロシア昔話 せりか書房
- 産業能率短期大学(編) (1970). 創造能力開発法 経林書房
- 鹿内信善 (1989). 《創造的読み》への手引 勁草書房
- 鹿内信善 (1998). 図形記号解説を取り入れた授業づくりの可能性 読書科学, **42**(1), 16-26.
- 鹿内信善 (2003). やる気をひきだす看図作文の授業—創造的「読み書き」の理論と実践— 春風社
- 鹿内信善 (2005a). 「創造的読み」の教育史 国語教育史研究, **3**, 3-22.
- 鹿内信善 (2005b). 飯田広太郎の読方教育と綴方教育 国語教育史研究, **4**, 68-72.
- 鹿内信善 (2005c). 看図作文—絵図を見て作文を書く— 指導と評価, **51**, 38-41.
- 鹿内信善 (2006). 表現意欲を喚起する看図作文 月刊国語教育, **26**(2), 16-19.
- 鹿内信善 (2007a). 「創造的読み」の支援方法に関する研究 風間書房
- 鹿内信善 (2007b). 主体的学びの授業 杉江修治(編) 教育心理学 (pp. 144-154) 学文社
- 鹿内信善 (2007c). 看図作文が子どもの書く力を劇的に伸ばす! 授業づくりネットワーク, **268**, 11-13.
- 鹿内信善 (2008). 国語の授業で育てる創造的思考力 記念論文編集委員会(編) 国語教育を国際社会へひろく (pp. 66-77) 溪水社
- 鹿内信善 (印刷中 a). 協同学習による看図作文授業の進め方 協同と教育, **5**.
- 鹿内信善 (印刷中 b). ジェネプロアモデルを応用した詩の創作指導 読書科学
- 鹿内信善・伊藤裕康・石田ゆき・伊藤公紀・石川清英・渡辺 聡 (2008). ヴィジュアル・リテラシーの授業開発(III)—景観教育に活用可能なヴィジュアルテキストの作成— 北海道生涯学習研究, **8**, 109-118.
- 鹿内信善・伊藤裕康・石川清英・伊藤公紀・石田ゆき (2008). ヴィジュアル・リテラシーの授業開発 (II)—学習者参加型授業に活用可能なヴィジュアルテキストの作成— 道都大学紀要美術学部, **34**, 27-45.
- 鹿内信善・伊藤公紀・石田ゆき・渡辺 聡・伊藤裕康 (2007). ヴィジュアル・リテラシーの授業開発 (I)—「入門演習」授業への活用— 札幌大学総合論叢, **24**, 19-39.
- 鹿内信善・兒玉重嘉・石田ゆき・渡辺 聡・伊藤公紀 (2008). 看図作文の授業開発 (VI)—「見通す力」を育てる試み— 北海道教育大学紀要(教育科学編), **59**(1), 209-224.
- 鹿内信善・兒玉重嘉・石田ゆき・渡辺 聡・伊藤公紀 (印刷中). 看図作文の授業開発 (VIII)—キャラクター設定法のための絵図作成と授業モデル— 北海道教育大学紀要(教育科学編), **59**(2).
- 鹿内信善・栗原裕一・渡辺 聡・伊藤公紀・石田ゆき (2007). 看図作文の授業開発 (I)—心理的リアクタンスを作文の動機づけに活用する試み— 北海道教育大学紀要(教育科学編), **57**(2), 101-111.
- 鹿内信善・盛山聖子 (1990). 創造的読みから創作指導へ—図形系列を読ませるための予備的検討— 年報いわみざわ, **11**, 19-26.
- 鹿内信善・渡辺 聡 (1992). 授業改善のためのアクションリサーチ (I)—理解操作を含む授業モデルの開発— 北海道教育大学附属教育実践研究指導センター紀要, **11**, 13-24.
- 鹿内信善・渡辺 聡・石田ゆき・伊藤公紀・兒玉重嘉 (印刷中). 看図作文の授業開発 (VII)—看図作文を活用した行事作文の授業モデル— 北海道教育大学紀要(教育科学編), **59**(2).
- 鹿内信善・渡辺 聡・石田ゆき・伊藤公紀・栗原裕一 (2008). 看図作文の授業開発 (V)—インプット・アウトプット法に活用する絵図の作成— 年報いわみざわ, **29**, 29-40.
- 鹿内信善・渡辺 聡・伊藤公紀 (2005). 小学校における「看図作文」の指導 (IV)—オリエンテーション変更作文の試み— 年報いわみざわ, **26**, 1-10.
- 鹿内信善・渡辺 聡・伊藤公紀・望木郁代・飯田留衣 (2006). 「見る」活動を取り入れた国語科授業づくりの可能性—絵図教材の創造的読み— 年報いわみざわ, **27**, 1-12.
- 鹿内信善・渡辺 聡・栗原裕一・伊藤公紀・石田ゆき (2007). 看図作文の授業開発 (II)—創造的看図作文を可能にする絵図の作成— 年報いわみざわ, **28**, 9-20.
- 鹿内信善・渡辺 聡・栗原裕一・伊藤公紀・石田ゆき (2008). 看図作文の授業開発 (IV)—オリエンテーション変更作文に活用可能な絵図の作成— 北海道教育大学紀要(教育科学編), **58**(2), 147-157.
- 鹿内信善・渡辺 聡・栗原裕一・伊藤公紀・石田ゆき・菅原春紀 (2007). 看図作文の授業開発 (III)—自己をふり返り, 未来を探る活動を促す絵図の作成— 北海道教育大学紀要(教育科学編), **58**(1), 265-278.
- 下田好行 (2008). 国語科の授業で「活用型の教育」を—PISA 型読解力を育成する学習指導法の開発— 教

- 育と「知の活用力」を考える会（編著） 活用力を育てる国語の授業（pp. 14-28） 日本標準
- 杉江修治（2004）. 教育心理学と実践活動—協同学習による授業改善— 教育心理学年報, **43**, 156-165.
- 鈴木みどり（1997）. メディア・リテラシーの基本的な枠組 鈴木みどり（編）メディア・リテラシーを学ぶ人のために（pp. 23-39） 世界思想社
- 田中宏幸（2008）. 金子彦二郎の作文教育—中等教育における発想力・着想力の指導— 溪水社
- 鶴田清司（2006）. 「読解力」の低下問題をどう乗り越えるか—〈解釈〉と〈分析〉の統合による授業づくり— 科学的『読み』の授業研究会（編）確かな国語力を身につけさせるための授業づくり（pp. 172-177） 学文社
- Walker, J. A., & Chaplin, S. (1997). *Visual culture : An introduction*. Manchester, UK : Manchester University Press. (ウォーカー, J. A.・チャップリン, S. 岸 文和・井面信行・前川 修・青山 勝・佐藤守弘(訳) (2001). ヴィジュアル・カルチャー入門—美術史を超えるための方法論— 晃洋書房)
- Wäre, M., Töllinen, M., & Koskipää, R. (2004). *Uusi salainen kerho 3*. Helsinki, Finland : WSOY. (バレ, M.・トッリネン, M.・コスキパー, R. 北川達夫・フィンランドメソッド普及会(訳編) (2006). フィンランド国語教科書小学3年生 経済界)
- 吉田典史（2008）. 絵図を見て書く作文指導と「書く」意欲との関連 年報いわみざわ, **29**, 41-52.